

猛暑の八月、クーラーの利いた部屋で過ごす毎日、ふと考えた。

そうだ、この際だからめんどくさい長い小説を読もう。そこで選んだのが『孟嘗君』。宮城谷昌光著の、紀元前二百年代の中国の歴史小説全五巻である。

まず初め、後に孟嘗君となる人物の文は、五月五日生まれで、縁起が悪いことを理由に父の命令で殺されそうになったが、無事に生き延び他人の手で育てられるところから始まる。

だが、全五巻の内、三巻までが、文を育ててくれた時代背景と、文を殺戮の場から連れ出して仮の父となった快男児の風洪や、その周辺の人々が描かれている。中の一つにはこんな話もある。

秦は孝公の時、宰相を一般公募したのである。選ばれた者には官位も土地も与えらるゝ。…… 応募した学識も胆力もある、風洪の妹の夫、公孫鞅こうそんわうが選ばれ、見事な執政を成した。そして首都を咸陽かんように移した。

咸陽は遷都からおよそ百四十年後におきた楚漢戦争の最中、南方より攻め上つて来た項羽という、二十代の英雄によつて灰塵に帰するまで秦の首都であり続けたそうだ。

文が、彼を殺せと命じた父と出会うのは第四巻である。

父は、斉せいの公人、田嬰でんえいである。当時、斉で最も勇健な男だった。

風洪は文の親子の対面を天才戦略家の孫臏そんびんにゆだね、果すことが出来た。

新たな父の家には食客が二百人も居て、文はそこに入り浸っていた。物まねの上手い人、説得の上手い人、人形作り、笛、盗み、聞き耳等々の上手がいた。

一巻から四巻までの卓越した人々の情操教育もさることながら、食客達にも慕われ、人々すべてが文の財産になったのであろう。

そして第五巻。

文は「孟嘗君」と呼ばれるようになる。孟嘗とは、死後の尊称と言われるが、生前から号していたとされている。彼は幼少期から学んだ平等の精神を持ち、誰からも慕われるようになった。

全巻を通して、政治も戦闘も正しい精神が元になっているので読みやすく面白かった。だが地名も人名も難しい。反古紙に書いては見返し、また少し読んでは見返し。猛暑にはうってつけだった。